

講義科目名（コース名）	刑法演習（法科大学院） 刑法各論Ⅰ（法学部 車道）
名前	岩間 康夫

「刑法演習」の方は、昨年度に引き続き利用した。基本的には昨年度の利用形態を踏襲したが、今年は事前課題の提出も Moodle への一太郎ファイルの投稿によって処理することにした（本誌 35 号 54 頁も参照）。これにより、毎週課題の收受や教員用のコピー作成により車道教学課のお手を煩わすことがなくなり、喜んでいただけたのではなかろうか。

今年は事後レポートの提出（毎回 4 名）が私の設定した期限の 6～12 時間前に出揃うことが多かったのが特徴的で、中には演習授業の終了後 2 時間ほどで提出の通知メールが Moodle より送られてくることもあった。しかし、事前課題（私はその週のはじめに「事前課題」フォルダにアップロードしておいた事例問題 2 題への解答概略）とほとんど変わっていなかったこともあり、授業での質疑や議論をほとんど意に介さず、「手抜き」をしている受講者もいることがよくわかった（事前課題での誤りをそのまま引きずった事後レポートになっている）。これには、事前課題もワープロソフトで作成させるようにしたことが影響しているのではないかと反省しているが、さりとて昨年度のような教学課への提出という方法に戻すのも今さら気が引ける。手抜きレポートは平常点評価で考慮

するようにし、シラバスでその旨明記しておくくらいが無難な対策であろうか。

今年度の特記事項として、さらに、公共の危険の発生が必要な一部の放火罪（刑法 109 条 2 項、110 条）につき、公共の危険発生の認識・認容が必要か否かという論点に関し、何らかのロジックを駆使して必要説を採ろうとする受講者の多数派に対し、共同担当者である奥岡直子教授（派遣検察官）が実務家の立場で、そこまで要求しては放火罪の証明が事実上できなくなってしまうとの危惧から、授業時も不要説を力説されたのだが、その補足的根拠づけをフォーラムへの投稿により展開された。限られた授業時間内で、しかも教員は矢継ぎ早の質問に対処するのが精一杯という状況で、貴重な補足説明の場として、図らずも奥岡検事が Moodle を活用されたわけである。

また、今年度は学内非常勤で法学部の講義科目「刑法各論Ⅰ」を担当させていただいたが、こちらでも補助教材（最高裁等の判例を集めたファイルや、授業時に言い足りなかった項目の補足説明等）や期末試験の出題スタイル・注意事項、さらには試験後の問題解説を受講者（登録 180 名余）の閲覧に供し、毎回の授業の進行状況や次回の予定をトップページで知らせるため、Moodle を利用した。